

近況報告

— 旧記念館の思い出 —

博士前期課程二〇一八年三月修了

大分県公文書館非常勤職員

高妻 朗久

例年、「近況報告」を寄稿させていただいて、似通った内容になると申し訳ないので、今回は本年度の夏に解体された旧十八号館（旧記念館）の思い出について書きたいと思う。

旧記念館については、実は大学入学前に中に入ったことがある。

高校三年生のおわり、たしか二月の頃のことだったと思う。大学入学が決まった私は、下宿を探すために母とともに別府を訪れたのである。

教務課に行っていくつか下宿の紹介チラシをもらうと、あとはずることが無くなってしまい、受付の方に「大学のなかでものぞいてきたらどうでしょう」と言われ、それもそうだと母と二人して大学をうろついていた。

といっても、まだ確か午後二時半ぐらいだったし、講義をしている教室に高校生と中年女性が飛び込むわけにもいかなから、自然と人気のない建物に足が向いた。そこは、大学正門入ってすぐの右

手にある古めかしい四階建てのビルディングである。

一階の入り口のガラス扉には、「18号記念館」とか「別府大学アーカイブズセンター」とか「博物館」とか書いてあって、古めかしいわりに落ち着きがない、なんとも形容しがたい印象を私に与えるとともに、妙に好奇心を刺激され、「おもしろそうだから入ってみよう」と探検するような気持ちで中に入った。

入ってすぐの左手にある「考古学実習室」は、灯りがともっておらず、半分ほど開いたドアから中をのぞいて「理科室のようだ」と思った。建物全体のひんやりとした空気も相まって、部屋の中に入ろうとは思わなかった。

そのまま、階段を上ってみることにした。「博物館」という表記がある以上、なんらかの展示施設があるはずだと思ったのである。

二階にある「講義室」にも前記の理由で入らなかった。三階には、なぜかソファアールと植木鉢、それから古そうな鬼瓦と「弁当の殻は持ち帰ること」「御用の方はノックを」といった文言の書かれたホワイトボードが置いてあった。素通りして四階に行ってみると、「博物室」（だったと思う）とプレートがかけられた部屋のガラス扉は施錠されており、中に入る事ができなかった。そして、踊り場には、過去の在学生が制作した古代人が大陸間の海をいかに渡ったのかを実験考古学的に再現するための木彫りのカヌーが、埃をかぶった解説パネルや、当時の学生の写真とともに置いてあった。

私は、今日は博物館の休館日なのだろうと考え、同時に突如あらわれたカメラの印象があまり強烈だったので、「よくわからないけど別大はなんだかすごいな」と思った。

一方、母は階段に疲れて三階の踊り場のベンチで休憩していていた。「御用の方はノックを」という文言を見つけた彼女は、「博物館が何階かきいてみよう」と思って、ボードの横のドアをノックした。しばらくして、眼鏡の男性があらわれた。

階下が騒がしくなったので、私が三階に降りてみると、母と眼鏡の男性が話をしていた。入学してからわかったが、その男性は後藤重巳先生であった。大変に失礼な話であるが、そのままにも知らずに「博物館はお休みですか」とお尋ねすると、先生は「博物館、いま展示変えて開いてないんですよ」と仰られた。

先生は鬼瓦の説明をしてくれた。江戸時代からある寺のものだということが以外、実はあまり覚えていないのだが、なにかの拍子に「これ、触ってみていいですか」と申し出ると「いいよいいよ」とこやかに応じてくださった。その瓦のざらついた感触と、後藤先生の笑顔が、私の別府大学の最初の想い出である。

当時、アーカイブズ学の存在すら知らなかったが、入学後に先輩に連れられて、同じ建物の鬼瓦がある階のアーカイブズセンターで、生まれて初めて江戸時代の古文書の原本を手にとって読んだ。

この旧アーカイブズセンターでは、さまざまな経験をした。アー

カイブズ学を学ぼうとする志を同じくした仲間とともに、実際に古文書を手にとって読んで目録をつけるために、それこそ解読の辞書の引き方から勉強して、じっと見つめているとついつい眠くなってしまいう崩し字の魔力に打ち勝つために格闘した時間は、大学における私の楽しい青春のワンシーンであった。

すでにご退官されたが、丑木幸男先生がセンターを利用するうえで注意書きをポスターにして貼り出されていて、その文言が見事な古文書風の漢文調子で、しかもアーカイブズセンターを「記録史料中心」とルビまでふって表記してあるのには大笑いした。

講義を終えられた針谷武志先生がおられると、古文書の読めない文字について質問したり、事前に出题された古文書の解読問題の添削をしてもらったりした。その結果、解読できた文字が以前よりも多くなっていたり、以前読めた文字が読めていなかったりして一喜一憂し、「読めないときは何度か書くと覚えるよ」とか「一文字だけに注意するのではなく、前後のながれで文字を推測してごらん」といった実践的なアドバイスは、いまの仕事につながる大事なものになっている。

後輩たちに古文書の読み方を教えたこともあった。そういうとき、センターを最後に出るのは施錠をする私であったが、後輩たちは外で待っていて、鍵を返却するために大学事務局に向かう道を和気あいあいとしながら歩いて帰ったことを思い出す。

あの頃の様々な出来事があるから、現在の自分があるのだと実感する。その体験の場であった旧十八号館がなくなってしまうのは大変に寂しい。しかし、新しく落成した十八号館もまた素敵などころである。

新十八号館が、今おられる在学生の方や新入生の方にとって、私と同じような楽しい思い出をのこせる場所になればいいと思う。